
残虐天使と平和悪魔

深桜 せつな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残虐天使と平和悪魔

【Zコード】

N7270G

【作者名】

深桜 せつな

【あらすじ】

主人公 山下圭介は元来靈を見る事のできる体质だった。そこに現れたのは一人の女の子。「契約完了 ってね」そこでムフフな展開になるかと思いきや、そこは我らが圭介!「知るか」「ウザい」あまつさえ、裾で口をぬぐう仕草!!--これが我らが圭介だ。まだまだ序盤ですがお楽しみ下さい。

第一話 天使と悪魔と変態と

ここは人間でいう“天国”と呼ばれる場所。

人間界から上に……上に……ずっと上に行つた所にある。

地面は雲となつてあり、その世界は空の青色で構成されていた。

背中に羽を生やし、頭には黄色い輪を浮かべている。彼らを人間は

“天使”と呼んでいる。

平日のサラリーマンのごとく、忙しく動く様は、神聖なイメージのカケラもない。

しかし、ひとつだけじつと立つてゐる影があつた。

「おまえ、またサボつてんのか？早く通せよな……」

空気が澄み渡るような綺麗な声で、少年は言つ。

見たところまだ12・3歳くらいだろうか、眉をひそめ、やれやれといつた様子でため息をつく。

その視線の先には、一人の少女が寝そべつてゐた。

そして、また視線をあげると、天使に連れてこられた証として輪を頭につけられた人達が、どこに行つたらいいのかさまよつてゐた。

「ああん？ そんなん適当でいいじゃん」

心底嫌そうに少女は顔を向ける。

その顔はまだ子供が抜けないものの、仕草や声色は大人の色氣を匂わせていた。

「ばかやう……お前ならわかるだろうが……連れてこられた死人を放置しておくと、幽靈になつて永遠にさまよう事になるんだぞ？」

そし

たら、誰かにとり憑いて、同じ死に方をす……」

「あーはいはい。わかつたわかったから、そんなガミガミ言つなつて」

少年の言葉を遮るようにして、少女は体を起こす。

さらりと揺れる純白の髪からは、ほんのりと太陽のにおいがした。
「お前が言わせているんだろうが……たのむからしつかりやつてくれ、怒られるのは俺なんだからさ……」

少女はちらと彼の顔を見ると、興味がないかのように顔を背けた。

「はいはい、マルス様ーあなたの命にしたがいますわあー」

唇を尖らせ、嫌そうに呟く少女。

マルスと呼ばれた少年は「一度目のため息をつき、口を開く。
「まったくもう……じゃあ、ここは頼んだからね」

「へいへい」

少女も同じくため息をつきながら割り振つていく。

そこで口を開いたのは死人となつた男性だつた。

「あのう……シーナ様……ワシはどこに行くんじゃかいのう……」

シーナと呼ばれた少女は、放り投げていた鞄の中をゴソゴソとあさり、一枚の紙を持つた。

その紙は「神判の書」と呼ばれ、天使なら誰もが持つてゐる代物である。

そこには死人の名前、性別、住所、死んだ所、死んだ原因、人生の評価……などなどが書かれてある。

もちろん一枚の紙に死人全員の名前があるのでなく、半径1メートルに死人がいた時のみ紙にその死人の情報が紙に映し出されるという

しくみである。

「あんたは評価がいいからチャンスをあげる。向こうに行きなさい」人生の評価がよければ、その死人は輪廻転生の輪に入ることができる。

つまり、生まれ変わる事ができるのだ。

それを判断するのは、その人の担当になつてゐる天使が評価を下す。天使の前では人間のプライベートなど一切存在しない。

『つたく、なんでこんなにジジババばかりなのかしら！たまには

私も若い男の子とかをしてみたいつづーの……』

シーナは正直不満だつた。

天国に来るのは、ほとんどが骨と皮となつた死人のみ。

毎日毎日何百人もの人間が死んでいく中で、シーナにとつての癒し（若い男ともいう）がないということは相当な苦痛なのである。

ぶつぶつと死人に聞こえないように文句を呴き続ける。

「はい、あんたはこつち。あんたはこつち……つたくせつと行きなさいよ……」

「シーナ」

仕事中に急に呼ばれてイラつきながら声のした方を見る。

「なあによつ！！！」

そこにはシーナの憧れの人がいた。

マルスなんかとは比べ物にならない優しい目。

マルスなんかとは比べ物にならない癒しの声。

マルスなんかとは比べ物にならない包容力。

パーフェクト!!!! いえ、パーフェクツ!!!!

「お……お疲れ様です！！」

カチンコチンに固まりながら、声を必死に出そうとするシーナ。

その様子を見てか、くすりと青年は笑う。

「シーナ、そんなに固くならないで。ほら、彼らが迷つているよ。ちゃんと道を示してあげないとね」

「はつ！はひつ！……！」

裏返つた……。

シーナは自分の声を恨むが、青年はまるで気にしないように二二二コと笑つたままだつた。

青年は“天使長”という地位を持つている。

シーナとマルスは同じく“見習い天使”という地位を持つているから、青年は彼女らにとつて上司というわけである。

やはりというかなんというか、シーナの目はハートのままであつた。

『ああ……もう、本当に格好いいわっ！ あの人ならめちゃめちゃに

されてもいいわっ！……『……』

何かよこしまはオーラを漂わせせるシーナに異変を感じてか、青年の笑顔が多少ひきつる。

ただし、青年には欠点があった。

それは……。

「がんばります！……Hロス天使長……！」

シーナは高らかに叫んだ。

「暇ですねえ……」

熱湯地獄にまるでお風呂にでも入るかのように漫かつてている少女が呟いた。

ボコボコとマグマの温度を誇る熱湯地獄も、彼女の前では湯加減のちょうど良いお風呂なのである。

彼女は鼻歌でも歌いそうな勢いだつた。

ここは人間界でいう“地獄”彼女はここで“悪魔”をやつていた。最近の人間は、犯罪意識が薄いのか、めったに地獄には来なくなつた。

来るとしても、毎回毎回“私は犯罪者です”という仮面を貼り付けてような人が来るだけである。

「もうちょっとマシな人は来ないんですかね……」

地獄にいる以上マシな人というのもないだろうが、とりあえず彼女は“マシ”な顔、いわゆるイケメンを探していたのである。

「フンフンフーン」

ついに彼女は鼻歌を歌いだした。

その横では死人が絶叫しながらのたうち回っていた。

また閻魔様に罰を与えられた人間が

それを見ながら笑い転げる他の悪魔

「黒崎さん、お仕事ですか？」

ちらと彼らを一瞥しながら、熱湯地獄、もといお風呂からあがる彼女。

一 はー あああつ ハヒ ハク くう~~~~~

猫みたいに毛糸を噛み、背伸びをする。

なにをし掛しようか

仕事は休むからいい。あえて言ひながら、暇を潰すのが仕事みたい。

もちろん、地獄も

そこに一人の影が現れた。

「ルナ様あーちょっと手伝って下さいよー……」

源氏で語えがけの果る事

書類の山に埋もれ、顔すら見えない。

あらあら……ルイン君……その書類はなんですか?」

レバシナホニシツヒテ聲く好ひめぐが、なんとか本制を整える。

「どれどれ……これは私の書類ですか?」

その紙には「見習い悪魔 - ルナに告ぐ」から始まる仕事内容が記されていった。

二枚目……二枚目と見ていくはそれでそれがうへて説明文だと復

「仕方ないですねえ……」

小さくため息をつきながら、もくもくと書類に目を通す。

「またいつも仕事ですか……もうと楽しみのある仕事はないんですか？ねえルイン君？」

「ほ……僕に言われましても……」

ルインはルナに見つめられて、硬直する。

それはまるで、ねずみが蛇に睨まれるがごとく。

「わかりました。もうその書類は持つていってもいいですよ

「言われてルインはキヨトンとする。

それもそのはず、ルナは始めの一枚しか見ていないからだ。

ルナのお気楽ぶりは地獄でも有名である。

また仕事をそつちのけで遊びに行かれてはたまらない、その度にルインはお仕置きを受けていた。

「ちょ……ちょっと待ってくださいよ……ちゃんと見ていただかな
いとボクが……」

「あらあら、心外ですねえ。ちゃんと内容把握していますよ」

「本当ですか？」

ルインもお仕置きを受けたくない一心で必死に説得する。

「わかりました、では、いまからお仕事に行つてきます。それなら文句はないでしょう？」

「ええ……またこの前みたいに、若い男の……ひえつ……」
ルインのセリフはルナの圧倒的なオーラの前にはなすすべもなかつた。

小さくなりながらルインは呟く。

「いつてらっしゃいます、ルナ様」

「ええ、行つてきます」

そう言ってルナは姿を消した。

エロス天使長と別れ、今日の分の仕事を終えたシーナは一人考えていた。

『何か面白い事でもないかなあ……』

ふわふわとした雲の感触を楽しみながら、シーナはまた横になる。太陽の光は嫌というほど浴びているのに、なんでこうも眠たくなるのか……。

「あーあ、眠てえなあ……」

ボソボソと文句を言う。

何の気なしに、人間界を覗いてみたりする。そこに映つたのは一人の少年。シーナの顔が不気味にゆがむ。

「暇だなー」

山下圭介はどこにでもいる大学生。

いつもラフな格好をしていて、髪はボサボサ、整った顔立ちなのに本人はとんと無頓着であった。

これぞ宝の持ち腐れ、これが山下圭介。

部屋は薄暗く、太陽の光すらも分厚いカーテンに遮られてしまつている。

音楽なんものは一切流れなく、聞こえてくるのは時計が時間を刻む音と、マウスのカチカチという音のみ。心にもカビが生えてしまいそうな息苦しい空間の中に彼はいた。ジヨリジヨリと伸びきった髪をさすりながら、彼は呟く。

「彼女欲しいな……」

あきらかに無理である。

これぞ馬鹿。これが山下圭介。

世間というものが分かつていない。

やはり山下圭介、通称ネクラと呼ばれて19年、その通称は伊達ではない。

しかし、圭介にも特技というものがあった。

「あーもう！うつせえうつせえ！！黙つてろ…」

『なんで私を殺したの？』

「てめえなんか殺してない！いいからさつさと消えやがれ！」

『なんで嘘をつくの？貴方は私を殺したのに』

それは圭介にしか見えない……。

“幽靈”

毎日といつていいほど聞こえてくるから、ノイローゼ気味になつた経験もある。

かといって、人に話せば笑われるか、からかわれるかのどちらかだ。親でさえも、幽靈などは信じてない。

信じてないというのは少し語弊があるが、 “信じているが信じてない”と言つた方が正しいのかもしれない。

それは……。

「なんだ！圭介！お前また見えたのか！？」

ドアを開けていきなり入ってきたのは圭介の父親。

その名を秀といい、『心靈研究家』なるものをやつている。

圭介から見れば、インチキ以外の何者でもないが、秀の守護靈が高い位の靈の為か、妙に勘のするどい所はそれを確信にさせてしまう。

「ん？今度はどんな靈なんだ？」

「だーかーら！見てないつて言つてるだろ？？」

父親を廊下に突き飛ばしながら圭介は叫ぶ。

「じゃあなんで騒いでいたんだ？ん？」

秀の顔は満面の笑みだった。この変人が圭介に似たのだろう。

その時隣のドアがものすごい勢いで開かれた。

そこに立っていたのは一人の女の子だった。

すらりとした足、ぷっくりとした肌、整つた顔立ちだが、今では怒りの炎をその大きな瞳に浮かべていた。

「なにいつてるの？また幽靈とかなんだとか言つてるの？」

「おお、夏実！お前もとうとう幽靈を信じ……」

「……るわけねえだろうがあ！――！クソオヤジ！――！」

「「う！」はあ！……」

細い腕から繰り出された鉄拳を顔にモロに受け、きりもみしながら飛んでいく。

夏実は“ふんっ！ばーか！”と言いながら自分の部屋に戻つていつた。

バタン！と思わず肩をすくめたくなるような大きな音が響き渡る。圭介もオヤジを一瞥し、軽く眉をしかめて、ドアを閉めた。そこには、かすかに光悦の表情を浮かべた一人のオヤジだけが残された。

「なにやつてんだ……オヤジつてヤツはつたく」

ため息混じりにパソコンに向かつ。

ネットサーフィンをしながら、画像を探す。

格好いい言葉を吐きながらも、やることはオタク。

やはり山下圭介。それが山下圭介。

「あんたまたネットばっか見てるの！？」

いきなり後ろから声をかけられて、頭の上から電気が走つた。

後ろを見ると、頭の上に輪つかを浮かべた女の子が、天井から突き抜けるようにして目だけ覗かせていた。

「だ……誰！？」

その言葉と同時に体をすり抜けさせて着地する。

重力など無視しているかのようにふわりとした動きだつた。

「あたしが誰だか別にいいでしょ！？まあ、どーしてもつて言つなら名前教えてあげてもいいけど？え？何？聞きたいの？仕方ないわね

！あたしの名前はシーナ！敬意を込めてシーナ天使様とでもいいな

さい！――

耳をふさぎたくなるような大声で、朗々と語る女の子にきょとんとした視線を向ける。

圭介はふうとため息をつくと、またパソコンに向かう。

「なあつ！あんたちょっと無視するなつてーの！」

『あーあー、うつせうつせー無視無視』

いくら天使といっても所詮は靈体、この世の者ではない為、物質を触れない。

だからシーナは殴れない。

シーナの拳が虚しく宙を舞う。

「ねえってば！」

『無視無視』

「…………」

わずかな沈黙、その場にはマウスの音と時計の音しか聞こえない。たまにキーボードのカタカタといった音が聞こえる。

無機質な音だけがそこを支配する。

何時間たつたのだろう、圭介は一段落したのか、それともただ単に飽きたのか、ぐいっと背伸びをする。

『茶でも持ってくるかな』

座っていた椅子を下げ、立ち上ると彼女と目が合った。

そして、シーナはニヤリと笑った。

それは彼を凍てつかせる程、不気味な笑みだった。

シーナは一瞬にして圭介の眼前へと体を持つていく。

突然現れたシーナの顔に驚き、体を引くと後ろの机にあつたものがバタバタと落ちていった。

そして、何か柔らかいものが口を覆つた。

「む……むぐつ！――」

何が起こったか理解できず、抵抗する圭介。

手足を動かせば動かすほど、自分の椅子がギシギシと音をたてるだけだ。

シーナは圭介の唇から離れると、クスクスと笑った。

「契約成立つてねー」

圭介は頭が真っ白になり、“ああ、契約が成立したんだ……”くらいにしか思つていなかつた。

それほど一瞬のことであり、圭介自身も話についていけない。“なあによつ！あたしが契約してあげたんだから喜びなさいよね！”腰に手を当て、『まつたく』といった風にフンと鼻をならす。

圭介の頭の上には依然として、？マークで埋め尽くされていた。

「さ、茶でももつてくるか……」

さきほどやつしたように、再び腰をあげる。

さらに、手の甲で唇を「ゴシゴシ」と拭いた。

「なつ……あんた！なにしてんのよー？」

「なつて……まったく、俺は忙しいんだけど……？」

さらりとそういうつてのけた。

圭介にとつて、“人間”と“人間ではないもの”的区別は簡単である。

“人間でないもの”とはつまり、靈体。

俗的な言い方をすれば、幽靈のことである。

圭介には、人間の形に見えると共に、白いモヤのようなものが周りを包んでいるように見える。

それに、じつと見なくてはわからないが、うつすらと透けている。

声についても、区別する事ができる。

“人間”の声は耳で感じるが、“人間でないもの”は脳に直接響く感じがする。

これは普通の人間の靈や、地縛靈ならば特に違和感も感じないのだが、悪靈の類になると、声が響くたびに脳を揺らされる感じがする。これらが区別の方法である。

秀曰く、もつと簡単に区別できるらしいのだが、圭介はこいつやって区別していた。

圭介の目の前に立つてゐる彼女はなるほど、嫌な感じはしないもの

の、圭介には特に興味もなかつた。

なぜなら、一次元ではないからである。

さすが山下圭介、オタクつぶりも人並みではない。

イケメンに産んだ両親も、そのギャップには泣いているだろう。

その時、秀は……。

「んふふ 圭介今日も格好いいねえ……」

圭介の部屋にとりつけた小型カメラで様子を覗いていた。本人は大真面目に“圭介は靈媒体質だから靈が寄ってくるに違いない”といった大層な大義名分があるのだが、なにぶん秀は一般人であり

、靈能力のカケラも持っていないのだから、靈が見えるわけはないのだ。

よつて、圭介の私生活を覗く盗撮カメラとなつたのである。（注・犯罪です）

ちなみに圭介はこの事実を知らない。

秀のメガネの下の瞳がキラリと光る。

しかし、それは決して変態じみたものではなく、圭介の父親と思わせるに相応しい顔立ちをしていた。

だが、彼は変態である。

圭介の90%は父親の遺伝子で作られたと言つても過言ではないだろづ。

結論 - 彼は別に泣いてなどなかつた。むしろハアハアと興奮していた。

圭介は隣でギヤアギヤアといひるさい（自称）天使をちらりと見ながら、階段を降り、台所に向かった。

元々（自称）天使を名乗る輩は結構いる。

圭介も何人かを見てはいた。

それは宗教関係の人間に多く、少しでも話を聞くそぶりをすると、自分の価値観を人に押し付けに来るのだ。

正直言つてたまたなものではない。

曾祖父がお払いを生業としていたのもあり、圭介自身も本格的なものではないにしろ、お払いはできる。

しかし、めんどうくさい。

圭介はそういうやつなのだ。

だから、今回も同様に適当にあしらう事にした。

『まったく、朝っぱらからツイてない……』

ぶつぶつとボヤきながら、冷蔵庫の中に入っていた牛乳をパックのまま飲む。

冷たい液体が胃の中に入り、体を循環していく。

圭介の目が少し覚めた。

ため息をつきながら、ゆったりと歩く。

普通の歩き方ではない、傍からみれば圭介がおかしくなつたとすら思える。

しかしこれは『歩法』の一種であり、除靈にはかかせない行為なのだ。

『つたぐ、めんどうくさい……でも、耳元でギヤアギヤア言われるよ
りはマシか……』

横の（自称）天使は未だにわめきちらしていた。

圭介には内容はともかく、どうやつたらそこまで話続けるのかが甚だ疑問であり、別の意味で尊敬の念をこめていた。

「オン、アビラ、ウンケンソワカ……」

ブツブツと呪文を言いながら、（自称）天使に近づいていく。

「クル、シャクラク、ミナム……」

彼女は圭介の事など目に入らない様子で、しゃべり続いている。

「サイ、スルクス、ハクレンソリク……」

圭介は極力声を抑えながら、静かに歩み寄る。

「…………発！……」

圭介の最後の言葉が、朗々と響く。

普段のだるそうな雰囲気は微塵も感じさせない声だった。

それと同時に彼女の方に手を向ける。

これで、除霊は完了する。

……はずだった。

そつ、普通の霊なら、除霊されていたであろう。

・・・・・

天使に連れられて。

しかし、天使はいつまでたっても降りてこない。

それどころか、彼女はきょとんとした瞳を向けていた。

一瞬の間が場を包み、二人は見詰め合つた。

先に沈黙を破つたのはシーナだった。

「あんた……なんで天使を呼び寄せる祝詞を知つていいの？」

その顔には信じられないといった雰囲気がありありと出ていた。

それもそのはず、その祝詞は神聖なものであり、一部のシャーマンや退魔師、死を司る神以外には伝えられない。

もちろん、圭介のような一学生が知つていていいものではないのだ。天使も暇ではない、毎回毎回無駄に呼び出されてはたまつたものではないから……という理由もある。

それに、きちんと霊を判別する“眼”を持つていないと、天国に犯罪者が溜まつて、地獄に善人が集まるなんて事があつては、バランスが

崩れてしまう。

「…………」「…………」

圭介は突き出した手を見つめながら、何か間違っていたのか?と言いたげに首をかしげていた。

「…………どうやら、ただのイケメンってだけではなさそうね」「さつきとはうつて変わって、静かな口調で話す。

圭介はそれを無視して、今度は違う言葉を口に出す。

「ダーダス、ダーダス、アースターナー、ダーダース……」

その言葉を聞いて、彼女の顔色がさつと変わる。

そして圭介もまた、その変化を見て、詠唱の速度を速める。

「やめろ! その祝詞…………いや、その呪文は何を意味するのか知つて

「…………」「…………」

「…………怨!」「…………」

その時、怪しい雰囲気が辺りを支配した。

ルナは自分の部屋で望遠鏡を覗いていた。

小型の望遠鏡で、大きさはルナの半身くらいか、それは決して太くはなく、手軽に扱える印象を受ける。

「…………」「…………」

なにやら鼻歌を歌いながら、天井を望遠鏡で覗く。

そして、5分程度見終わつたかと思ひきや、今度は角度を変えていた。

それもそのはず、この望遠鏡は“世界的な盗撮者”（マーサーシタシ一口と読む）といい、地上の人物を勝手に覗けるといつ、すばらしい（?）

発明品なのだ。

勝手に覗くというのは語弊があるので、訂正しておこう。

本当の名前は“悪魔の目”といい、命を刈り取る担当の人物しか見れない。

これは、地獄で仕事をしている間に担当の人物が、定められた運命を人生を真っ当しているか、道に外れた事をしていないかどうかを

地獄

にいながらして見れるというものである。

普段はきちんと担当の人物の側にいなくてはならない。

人間の採点は基本減点方式である。

犯罪を犯せば、事故を起こせば、社会に影響を与えるれば、人の運命を（悪い意味で）変えてしまえば、その分に見合った点数を減点されてい

ぐ、一人当たり持ち点は100点。

寿命がくれば清算となる。

もちろん、100点の人や、80点以上のいわゆる『優秀』な人は悪魔の担当になる事はなく、天使の担当になつている。

地獄に連れて行くことが確定しているような人物や、天使の手には負えない人物が悪魔の担当になつてしまつ。

また、50点や平凡な点数で寿命を真っ当した人は一度天国に連れて行かれ、裁判をする。

それが先ほどシーナがしていた仕事だ。

ちなみに我らが山下圭介の点数は100点である。

かなりの親不孝者であり、墮落的人生を謳歌している圭介であるが、先ほどシーナに試みた通り、除霊をかなりやってきており、靈界（

天国

も地獄もまとめてこう呼ぶことにする)の手に負えない自縛靈の類を靈界に送つてきたので、その分がプラスされている。

もちろん圭介が例外というわけではなく、一般人でも改心した者、社会に貢献したものなどは加点といった事がされる。

余談になるが、地縛靈は問答無用で地獄に連れて行かれる。それは社会に影響を与える因子となりうるものであるから。というのが靈界の判断である。

だが、圭介はオーラでその善悪を判断し、その場に留まる事しかできなかつた自縛靈は天国に送つていた。

どうやら、靈界(主に天国)はそれを黙認しているようだ。しかし、この圭介の素性についてはシーナもルナも知らない。なぜなら、二人は眞面目に仕事をしていなかつたからである。おそらく、天国のエロスも地獄のルイン……いや、神様や閻魔様でさえも知つている。

靈界の住人にとって、山下圭介は有名人であり、彼の魂が運ばれていけば、それを巡り天国と地獄の争奪戦が始まるのではないかと危惧す

る人物がいるくらいである。

何せ、善惡のオーラを見る事は神や閻魔クラスの者しか見れないし、それだけ靈能力の強い魂を持ち込めば、早い話仕事が減るのである。

話を戻そう、ルナに支給された道具がこれである。

実はこれは位が上の悪魔しか貰えないのだが、手違いでルナの元に届いたのだ。

ルナはこれを改造し、勝手に変な名前をつけたあげく、担当していない人物まで覗くという非道っぷりである。

まさに外道!!!

もつぱら彼女の目的は決まつてゐる。

そう、イケメン探しだ。

「…………！」

ルナの鼻歌が止まつた。

ある一点をまじまじと見たまま微動だにしない。

『か……格好よすぎ！……』

鼻息を荒くして見つめた先にいたのは、そう、我らが山下圭介の姿があつた。

その時圭介はちょうど冷蔵庫から牛乳を飲んでいた。

『あの男らしい飲み方もまた素敵です！……』

うつとりとしながら、盗撮に没頭するルナ。（注・犯罪です）
そのとき、圭介は祝詞を唱え、効果がないと知るや、呪文を口にしだした。

ルナの耳には入らないものの、その雰囲気からして、除霊か何かを始めそうな勢いだつた。

圭介が口を大きく開け、最後の言葉を放つた。

「…………ハツ！……」

ルナがその言葉を認識すると同時に、意識が途切れた。

「…………ちつ、やつぱりそつだつたのね」

憎憎しげにシーナが言葉を吐き捨てる。

目の前には覚めた眼をしながら、黒い何かを見つめている圭介と、小さく丸くなつている黒い何かがあつた。

「あんた、あたしを悪魔に連れていかせようとしたわね？」

「だったらなんだつていうんだ？」

そう、圭介は天使が連れていけないと、悪魔を呼んで地獄に連れていつてもらおうと思つていたのだ。

あの呪文は召還術。

しかしおかしい、圭介の中にある靈力をかなり込めて召還した悪魔である。

その辺りの下級霊ならば一瞬にして連れていかれるはずである。だが、連れていかれないという事は、それなりに力はあるのだろうか？

こんなふざけた格好して……。チッと舌打ちして、“自称”天使を睨む。

召還した悪魔は、よく見れば黒いマントを羽織っていた。

そして、やたらと長い尻尾が、その呼吸に合わせるかのように上下運動をしていた。

「……いたたたあ」

黒い物体が発した言葉はこれであつた。

よく見ると「スプレした女の子に見えなくもない。

彼女はどこかおつとりしている顔立ちだが、眼には力を宿していた。一瞬だけ辺りを警戒して、異常がない事を確かめると、こちらに向き直つた。

「あの……」

「いつたいもう！なんなんですかいったい！……」

圭介が口を開くと同時にせきを切つたように彼女の口から言葉が発せられる。

その穢れをしらない丸い瞳を両側に吊り上げて必死の猛抗議を繰り返す。

さすがのシーナも口をあんぐりと開けてその光景を見ていた。

「私は別に見ているだけでよかつたんですよーなんでいきなり召還

……え？」

そこまでもくしたてておいて、やつと事の重大さに気づく。

「……あの、現世……ですか？」

そう尋ねられて、圭介はゆつくりと頷く。

「あなたが私を召還したんですか？」

やはりゆつくりと頷く。

「閻魔様しかできない悪魔召還をあなたがしたんですか？」

ボリボリと頭をかきながらゆつくりと頷く。

「うそーん……」

観念した彼女の嘆きはなんとも情けないものだつた。

持つてきたお茶をすすりながら、ため息をつくシーナ。

圭介は持つてきたお茶をテーブルに置きながら、ルナと名乗つた女の子の話を聞く。

「つていうか、あたしの時と対応違うんですけど」

といったシーナの抗議は軽やかに無視された。

あれから、圭介達の前に姿を現したルナはおろおろしながら、不気味な力を使おうとしていた。

それをシーナが止め、リビングにひきずり込んだのだ。

それからというもの、ルナは「ごめんなさい。助けて下さい」と泣きそうな顔になりながら、懇願していた。

その姿はとても悪魔には見えなく、同情した圭介はお茶を振舞つたと、こいつうことなのだ。

ルナは潤んだ瞳を地面に向けたまま、顔をあげようとしなかつた。

「えつと、君を召還したのは俺だ。でも、何故だ？たいていの悪魔はすぐに靈をつれていつたぞ？君はなんでこいつを連れていかなかつた

んだ？」「

こいつ、といいながら、シーナをくいっと親指で指す。

シーナはそれを見ながら眉をひそめ、整つた唇を歪ませる。

「そそそそ……それわあ！……」

あまりの緊張の為か、ルナの声が上ずる。

ルナはコホンと咳払いを一つして、続ける。

「えつと……その人は天使ですか？」

「は……はあ！？も……もう一度言つてくれないか？」

「だから、その人は天使なんですよ」

「こい つが！？ 亂暴者で、ガサツで口の利き方も知らないこいつがか！？」

「グサツ！ グサツ！ つと音を立てて、その言葉がシーナを貫く。

シーナのHPは残り少なくなっているようだ。

「え……ええ。天使は神様によつて守られています。悪魔も同様です、闇魔様によつて守られています。その力は均等に割り振られており

、それは崩してはいけないのです。もし、天使が地獄にいつてしまつたら、その魔力は地獄界のものになり、逆に天国では大幅に魔力を損

失することになつてしまします」

圭介は頷きながら聞くが、シーナの頭には已然として「？」が浮かんでいた。

ルナはそれを認知すると、どこからとりだしたのか、フリップボードを取り出した。

「つまりは、神様と闇魔様が綱引きをしていて、人間界にはすでにシーナさんという天使がいた。そこに私が召還され、地獄に引き込もう

としたと思った神様が、天使を人間界に留めようと引っ張つたので、私がその力に負けて引っ張れなくなつた。しかし、闇魔様も同様に思

つたので、私は天国には連れて行かれなかつた。その力が同じ位に留まつたので、私は人間界に取り残された」

二コ二コと説明を続けるルナに圧倒されたのか、シーナは頷く事しかできなかつた。

「わ……わかつてゐわよそれくらい」

ぶすっとしながらシーナは押し黙る。

「あ、紹介が遅れました。私の名前はルナ＝E＝ゾルティックと申します。」

「え……Eなの？貴女……」

シーナは驚いた声を出す。

圭介は訝しげな顔でシーナを見る。

「なんだ？Eって何か関係あるのか？」

「Eっていうのは、靈界の階級の事よ。ちなみにあたしはシーナ＝E＝……だから、靈界単位でみたら、私と同じ階級になるわね」

シーナの額には汗がにじむ。

その顔は自信満々のシーナには似つかわしくなく、それは圭介に少しの疑問を抱かせた。

少しの沈黙の中、先に口を開いたのはシーナだった。

「だったら、あたしと戦つても大丈夫なハズよね？」

ニヤリと狂氣の笑みを浮かべ、ルナに飛びかかる。

圭介は頭を抱えた、シーナが誰かに恐怖するなんて事はないのだ、やはりあれは嘘の……。

武者ぶるいか。

ため息をつく圭介、ここに自分が止めに入れば、さらに大きな被害になるだろう。

ルナがどうするかが見ものだが……。

未だにその光景が把握できないのか、小さく正座したままのルナ。シーナの拳が届きそうな範囲になつても動きだそうとはしない。圭介が注意を促そつとしたその時。

『悪魔術 - 臨 - 悪魔の鳴き声』
デビルクライ

聞こえるか聞こえないかの声量でルナの声が響き、木がへし折れたような嫌な音が同時に聞こえた。

「……う」

誰かの声が聞こえる。

周りだけが静かに時を刻む。

「うああああああーーーー！」

声を上げたのはシーナの方だった。

よく見ると、足と手が本来あるべきものとは逆の方向を向いていた。

「あああああああつーーーー！」

喉が壊れるのかと思つほど、シーナは絶叫する。

ルナはその光景をさきほどとはつてかわって、ひどく覚めた眼で見つめていた。

そして、ルナはシーナへと腕を伸ばす。

それはまるで、息の根を止めるかのように。

「なーんちやつて」

シーナの唇が唄をつむぎだし、瞬く間にシーナの怪我は完治した。

「まったくもう、こんな野蛮な天使がいてたまるもんですか……」

冷や汗をふきながら、ルナはそう言つ。

その姿は先ほど姿とは、まるで違つていて、圭介は自分の目を疑つてしまつた。

「野蛮じやないわよ！他の天使がお氣楽でのーんき街道まつしぐらだから、あたしが特別に見えるのよー！」

ルナは呟いたつもりだったが、シーナにそれを聞かれていたのを気づき、慌てて口を塞ぐ。

一方的にルナを言いくるめるシーナに対し、圭介が口を開いた。
「シーナ、あんたは靈力のなんたるかをよく知らないみたいだ。ルナ、君もそうだ」

そう言われるも、二人には何の事だかさっぱりわからない。

ただ、圭介がケンカになりそうなのを止めた。とそう映つただろう。しかし、違つた。

「あ……れ？」

「くつ……なによ。力が……入らない」

ルナは立ち上がりうつとするも、ぺたんと尻もちをつき。

シーナは見えない重力に逆らえないと徐々に体を沈ませている。

「圭介……あんたが何かしたの？」

シーナがそう言つたのを最後に、一人は意識を失つた。

シーナは重たい瞼を開け、辺りを見回した。

『……？』『こは？』

キヨロキヨロと辺りを見回すが、その光景に覚えはない。シーナの体には布団がかけられていた。いや、靈体であるシーナに布団がかかるわけはないが、実はシーナの体は実体化していたのだ。

これは先ほど圭介にした“契約”が正式に執行された証とでもいいうか。

この契約とは“その人間の担当になる”の意味である。

よつて、圭介の魂はシーナが責任持つて、天国に連れて行く事に決まつてしまつたのである。

『おおっ！完璧に実体化してるなー！よしよし、性格はアレだけど、あいつは顔がいいから許すか』

くつくつくといやらしい笑みを浮かべるシーナ。

そこに誰かがドアを開けて入つてきた。

「コンコーンっと……具合はどうですか？」

見知らぬ女の子に一瞬戸惑うが、ゆっくりと深呼吸をして通常能力

『命見眼』を使う。

どうやらこの女の子の寿命はまだまだあり、天国地獄の区別をするのには早すぎる段階のようだ。

なかなか高い靈力を持つていて、賢そうな顔つきの彼女を見ると、どうしても自分の物にしたくなる。

だが、まだその段階ではないため心中で小さく舌打ちをして、彼女の方へ向き直る。

「あ、ああ、特に問題ないみたいだ。あんたが布団かけてくれたのか？ありがとね」

「いえいえ、なんか兄貴の知り合いみたいで、勝手に面倒見とけて押し付けられちゃったんですよ」

アハハと小さく笑う彼女。

「しつかし、兄貴にこんな可愛い知り合いがいたなんて……コスプレしていたみたいですが、アキバかどうかで知り合った人ですか？」

シーナはもう一度自分の服装をみてみるが、人間界で人間が着ていた洋服を身に着けさせられているみたいだ。

天使は生まれた時から洋服なんてものはなく、人間と共に服も成長していくものだ。

だから、自分の体を保護してくれている服を簡単に捨てたり脱いだりする人間の感覚がよくわからない。

自分の服装をコスプレなどという言葉で表現され、多少怒りを感じたものの、あまり深くは考えないことにした。

どうやら彼女はさつきのイケメンの妹みたいだ。

契约の都合上怪しまれるわけにはいかないので、なんとか誤魔化さないと……。

「そうなんだよ。圭介さんにはお世話になつてます。シーナつていうんだ。よろしく」

「椎名さんですか……わかりました。あ、私夏実つていいます。よろしくおねがいします。あ、兄貴呼んできますね」

その後に“兄貴いー！”と半分怒りをチラつかせたような声が響いたが、シーナは特に気にしなかつた。

「なんだ、眼を覚ましたのか」

入つてくるなり溜息混じりにそう呟いたのは圭介だった。

シーナはドアが閉まるなり、慌てて口を開く。

「あんた一体私に何をしたの！？ハツ！まさか変な事とかしてないでしょうね！」

「するかバカ。俺が興味あるのは一次元だけだ。あと御園ちゃんを待たせているから早くしてくれ」

この辺りハツキリ言つてしまつ辺り相当痛い。やはり、我らが山下圭介。期待を裏切らない。

「御園つて誰よ?」

「ゲームのヒロインの名前だ」

「アンタがそつちに興味があるつていうのは、ま、もう、

「ぶんわかったわ！それで！アンタはあたしに何をしたの？」

「別に。ただ、説明をしにきただけだ。シーナが本当に天使であるなら、靈力によつてその力を發揮する。靈界、まあ、シーナの場合

国だな。天国にいる時は天国 자체が靈力をひきだす泉みたいな役割をしていたから大丈夫だったものの、ここは人間界だ。何の考えもなし

にポンポンと術を使つていればいづれは靈力も尽きてしまうだらう。ましてや、それで生まれたての子供よりシーナの靈力はええし。これ

が倒れた理由だ」

自分のヒロインをバカにされたのが悔しかつたのか、圭介は眉をひそめ、呆れたように返事をする。

「あ……あんた何者!? なんでそんなに靈界について詳しこの?」

その瞬間、圭介の普段は無表情な顔に変化があった。眼は見開き、怒りの形相を露にした。

シーナは圧倒的な靈力を全身に受け、再びベッドに突っ伏した。

「……どうだつていいだろ?」

圭介はただそれだけを呴くと、部屋を出て行く。

シーナの顔をちらりと見て、静かにドアを閉めた。

『あいつ……人間じゃ……ない！？』

シーナが思ったのはそれだけだった。

体の重力はなくなつたものの、手足はガクガクと震えていた。

自分の部屋のドアを開けた瞬間、黒い物体が迫つてきた。圭介は身の危険を感じ、とっさに体を引くと、それは人の形をしているというのが分かつた。

「ちっ！」

また親父に違いない、あの変態ジジイ。俺の部屋に入るなど何回言えば……。

容赦も遠慮もなく、拳を叩きつける。

「つたあ～～～～！！！」

予想外に甲高い声が聞こえ、圭介は目を丸くする。

「んもう！圭介さんヒドイですよ……」

それはルナであった。

ルナは夏実の服を着ているので、時折のぞく牙さえ見えなければ普通の女の子に見える。

尻尾と角は、限界まで小さくすれば尻尾はスカートで隠れるし、角は髪の毛に隠れるのだ。

ただし、靈力が小さくなるのが欠点でルナは再三文句を言つたが、圭介の「知つたことじゃない」にあっけなく打ち碎かれた。

ルナはシーナみたいに余計な詮索をせずに、ただ言つ事にコクコクと頷きながら聞いていたので非常に助かつた。

シーナもルナみたいにしていれば、余計な靈力を使わずにすんだのに……と圭介は小さく溜息をつく。

「けへへいすっけくう～～ん お父さんとあつそお～ぼお～」

ドタドタと廊下を走つてくる音が聞こえる。また来たよ、うちの問

題児が……。

それと同時に圭介は口を開く。

「ルナ」

「はーい！」

ルナの掛け声と共に尻尾と角が「**キ**」**キ**……も「**ハ**」**ハ**キ「**キ**」**キ**キとしか言いようがないほどに生えてきた。

「悪魔444つ道具！“地獄の呼び声”（ヘルクラウンド）」

お尻を立てながら華麗に廊下を曲がり、（秀は「コレをモ キータンと呼ぶ）ギアをハイトップにして駆け上がってきた彼の足に何かがまと

わりついた。

「んなあ！――！」

ゴツと鈍い音が鳴り響き、顔面スライディングをしながら、まだ開いていた圭介の部屋のドアに全身をぶつけ、やつと止まつた。ルナもただただ、汗を流しながらその光景を見守るしかなかつた。

「だ……大丈夫か？ 親父……」

さすがの圭介もやりすぎたと思ったのか椅子から立ち上がり、様子を伺う。

少しの沈黙がその場を覆つ。

秀は未だに起き上がる気配はない。

「あのあ～？ 大丈夫ですか～？」

ルナが人差し指でツンツンとつづく。

「ふはは～！ これくらいで圭介への愛が覚めるとでも思つ……」

バタン

ドアの音だけが虚しく響いた。

「圭介～入るからね！」

念のため確認をとつたものの、返事はなかつた。

不意に下を見ると、血と思われる粘着質のものが引きずられた跡があつたが、特に気にしなかつた。

体は実体化しているため、壁を通り抜けできない不便さを感じながら、シーナはドアをノックする。

入ろうと触つたドアノブが、かなり冷たく感じる。

意を決してドアを開き、圭介の姿を確認した。

「なんだお前か……」

「なんだじやないつてーのーもつちよつと喜びなさいよー」

「うつせーな」

相変わらず素つ氣無い返事に怒りを覚えたが、シーナは安堵した。いつものままの圭介であつたから。

「あのお……圭介さん……助けてください……」

会話の間に入つてきたのはルナだつた。

尻尾にコードが絡みついたのか、必死で抜け出そうとするものの、さらに絡まつて抜けなくなつていた。

「とれつ……ない……つ……！」

「待て！ルナ！そのコードは……」

ブツッ

「……」

『はあうつー』と少しく息を吸つたまま静止状態の圭介と。

「?????」

何が起つたか理解できず、ただ圭介の顔を見つめるルナがそこにはいた。

シーナはそれを見ながら、溜息をついた。

今更ながら、シーナには疑問に思つていたところがあつた。

“ 何故ルナは実体化しているのか？”

天使も悪魔も靈体である以上、人間界（物質界）には触れる事はできない。

しかし、ルナはついさっき地獄から呼び出されたのであり、氣絶する間も、移動する間もすべてシーナが共にいた。

それを見る限り。

“契約をしていないのだ”

契約をしていないのに物質に触れる事ができるとなると、考えられるのは一つ。

仮定の一つ、ルナはE（見習い悪魔）ではなく、S（悪魔長）であるという事。

Sランクになれば、物質界や靈界といった区別はなくなる。Sの人が普通の人間と混じって生活しているといった事もあるくらいだ。

天界はより親密に、より内側をさぐるべく、人間を調べている事がわかるだろう。

もしかしたら……。

仮定の一つ、ルナの担当がすでに山下圭介であつた場合。だが、これはない。

仮にそうだとしたら、シーナが契約できないはずだからだ。圭介の靈力が非凡でないといつても、命の灯火……つまり、魂は一つしかない。

それを二つに分ける事は無理なのだ。

だから、契約は1つの魂に2つ重複してできない。

知らないままに契約したとしても、実体化できない事になる。

シーナが実体化した以上、この仮定は否定される。

だとしたら、前者になるのが当然なのだが……。

もし、それが正しいとしても、シーナはどうにも腑に落ちなかつた。

“どうして偽る必要があるのか？”

111

あ、頭から煙が出ている

シテに参るのをやめかかる。まににかる
ノートは参る事が尋意ぞはなし。

いきあたりばつたりになるのがいい所であり、悪い所でもある。

『もうやめだやめだ！ 考えたつて仕方ないや！』

১০৯

た。

わがとてないにしても ひどいものだ

は処分されてしまうだろう。

圭介の情けない声が響く、シーナは面くらうた。

やくもみたいに怒ると思つたのに、全く反応をしめさない。夢だったのだろうか……でもそれにしては現実感がありすぎた。

「早く死になさいよ！」

ノーナの必死の抗議二、鼻で

シーナの必死の抗議に、鼻でせせら笑う圭介。

「だろ？ 厳倒的に管理できる数が少ないんだ」

シーナとルナはうんうんと頷きながら圭介の話を聞く。

「じゃあ、管理できない靈はどうなるんだ？ シーナ」

「うつ！ あたしに振るの？……えーっと、地縛靈になる？」

「正解。やればできるじゃないか」

まるで先生と出来の悪い生徒のように受け答えをする。

それが面白くて、ルナは一人クスクスと笑う。

「その地縛靈を靈界に送るのが俺の役目だ。わかつてくれたか？」

「じゃあ、あんたが魂ひつこぬかれて、靈界に行けば……？」

「間違いなく人間界と靈界のバランスが保てなくなるだろうな」

「それってマズくない？」

「ええ、とても」

「かなりな」

二人が同じタイミングで頷く。

シーナの顔色がさつと変わるので見て、圭介は慌てて付け加える。

「いや、だから俺と同じ役目をしてくれる人が現れたらそれでいいだろ？ それまでは地縛靈を沈めていけばいいんだし……」「なるほど……」

「わかつたか？ ジャあ、今から沈めにいくか？」

「え？ 今からなんですか？」

ルナが慌てたように言うが、圭介はその場から忽然と姿を消していった。

その時、トントントンと階段を下りる音が聞こえた。

「こんな時ばっかり行動が早いんだから……ちょっとー待ちなさいよー！」

「圭介さん！ 待ってくださいよー……」

こうして、三人の除靈生活が始まった。

その時に圭介が「それだけじゃないけどな」と言つた言葉は、二人の耳には入らなかつた。

第一話 天使と悪魔と変態と（後書き）

こんばんは、深桜せつなと申します。

読んでいただきありがとうございました。

全て読み終えて頂けた事に感謝します。

私はここで投稿したのは1作目ですが、実は5作品ほど手がけています。

この「残虐天使と平和悪魔」が（おそらく）なんとか読める部類だと思い投稿させていただきました。

見苦しい文章で不快な思いをさせてしまったかもしません。

なにぞご容赦願いたいと思います。

次巻も読んで頂けたら嬉しく思います。

special thanks

やるお様。やらない夫様。2chスレ やる夫が小説を書くようですがの作者様。2chスレ やる夫が売れっ子ライトノベル作家になるようでの作者様。妹。友達。妹の友達（え。

そして読んで頂けたあなたに感謝の意をささげます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7270g/>

残虐天使と平和悪魔

2010年10月10日02時02分発行